

# 梅津 祐介の虹の輪（第4学年）研究計画

## 1 本研究で目指す子ども

常に世の中の変化や時代の要請を背景として見直しを求められる学習が、総合的な学習の時間(以下、総合学習)である。つまり、子どもが実社会に働き掛けることを見据えた能力の育成が期待されているのである。そのような能力は、将来、子どもが世の中で主体的に生きることにつながっていく。このような教育的な支援はキャリア教育(一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して、キャリア発達を促す教育)と呼ばれており、確固とした勤労観・職業観を育成することが大切にされている。

キャリア教育は本来、教育活動全体を通じて行うものであるが、こと総合学習においては、様々な職種の大人の話の聞いたり、職場体験をしたりしながら、「どんな大人になりたいか」「どんな仕事に就きたいか」と内省させる授業が多く行われてきた。しかしながら、世の中の仕組みの中で将来のことを考える学習では、今ある職業が様変わりしたときに対応することが難しい。どのような職業が生み出されたときにも、子どもが社会的に自己実現する力を身に付けるようなキャリア教育への転換が必要である。

そこで欠かせないものは、働く上での態度(動機付け)と技能である。これらを備えることで、実社会に働き掛けることが可能となる。一般的に、実社会への働き掛け方としては、他者との情報交換から始まり、自分と他者との相互補完的な結び付きを経て、お互いが主体となって共通目標の実現を目指す、つまり互いの思いを共有する段階がある。この段階にまで発展したとき、実社会への働き掛け方は、世の中に融合する生き方となる。

そこで本研究では、世の中に融合する生き方に至る過程を、特に子どもの態度(動機付け)の更新という視点に着目して迫っていく。そのために、世の中に融合する生き方を実践している学習対象と子どもを出会い、その取組の価値について考えさせる。取組の価値に共感した子どもは、自分たちも学習対象と同じような取組を実践したいという思いを高め、その実現のための方法を考えるようになる。このような子どもは、**学習対象の生き方の価値を見だし、世の中に融合した取組を考える子ども**になる。

## 2 本研究で育成する資質・能力

①知識・技能	②思考力・判断力・表現力	③態度
○ 自己の考えを深めて表現するために必要な知識と技能	○ 自分がしたいことを基に社会との関係を考え、整理・分析したり、設計したりする力	○ 自らの役割を果たしつつ、多様な人々の思いを共有しながら、よりよい人生や社会を構築していこうとする態度

## 3 主張する働き掛け

単元の導入では、学習対象(対象としてかかわる人や、その人の取組)について考えるきっかけとなる資料を提示したり、活動を体験したりして、学習対象の存在に気付かせる。子どもは学習対象の価値や魅力を感じたり、学習対象が行っている活動を自分たちも経験したいと考えたりする。しかしながら、学習対象としてかかわる人(以下、「かかわる人」)の思いや活動に取り組む理由については考えていない状態である。このような子どもに、以下のように働き掛ける。

### 働き掛け1

**「かかわる人」の活動にふれる場を設定し、どのように思ったのかを問う。**

「かかわる人」に対してあこがれをもたせるための働き掛けである。子どもは実現させたいと関心を向けている取組がある。そこで、子どもが関心を向けている取組における熟達者である「かかわる人」に出会う場を設定し、どのように思ったのか問う。子どもは、**社会的な価値をとらえる**という「見方・考え方」を働かせ、「かかわる人」を自分たちの学習を進めるために必要な存在だと認識し(①知識・技能)、「かかわる人」への関心を高めていく。

### 働き掛け2

「かかわる人」の活動の動機について問う。

「かかわる人」の活動を支える思いに目を向けさせる働き掛けである。子どもは、「かかわる人」に魅力を感じており、自分たちも同じような取組を実現させたいと考えている。しかし、この段階では、「なぜ実現させたいのか」という目的が明確になっていない子どももいる。そこで、「かかわる人」が、どのような目的をもって活動を行っていると思うか問う。子どもは、「かかわる人」の生き方に着目し、自分の思いと比較・関連付けて考えるという「見方・考え方」を働かせ、自分たちはどうしてその取組を実現させたいのか、「かかわる人」はどうして取り組んでいるのか、自分たちと「かかわる人」の思いは違うのか、同じなのかということを考える（②思考力・判断力・表現力）。このようにして、子どもは「かかわる人」の生き方に目を向け始める。

### 働き掛け3

「かかわる人」の活動の動機について話を聞く場を設定し、自分の思いと比較させる。

「かかわる人」の思いを共有するための働き掛けである。「かかわる人」に直接話を聞くことで、「自分たちの思いと違うのか、同じなのか」、その問いを解決する。「かかわる人」の話を聞いた後、「かかわる人」と自分の思いに相違はあったか問う。子どもは、「かかわる人」の生き方に着目し、自分の思いと比較・関連付けて考えるという「見方・考え方」を働かせながら、「かかわる人」の動機となっているものが何かを考え、それが自分たちと同じであることを感じ（①知識・技能②思考力・判断力・表現力）、次なる意欲を高めていく（③態度）。

### 働き掛け4

「かかわる人」の活動について、自分だったらどのように構成するか問う。

共有した「かかわる人」の思いを自覚させるための働き掛けである。子どもが関心を向けている取組を実現させようとするとき、どうしても自分の思いを優先させてしまいがちである。しかし、「かかわる人」の活動はそうではなく、誰かの思いを受け継いでいるものである。「かかわる人」の活動について主体者の立場で構成することは、そこに込められた「かかわる人」の思いを確かめることにつながる。そこで、自分だったら「かかわる人」の活動をどのように構成するか問う。子どもは互いに意見を交換しながら（協働性）、「かかわる人」の生き方に着目し、自分の思いと比較・関連付けて考えるという「見方・考え方」を働かせながら、共有した思いをかたちに表し（③態度）、学習対象の生き方の価値を見だし、世の中に融合した取組を考える子ども（Cn）になる。

## 4 検証

### (1) 検証すること

- ① 構想した働き掛けにより、想定したCnになったか。
- ② 構想した働き掛けにより、想定した「見方・考え方」を発揮することができたか。
- ③ 構想した働き掛けにより、想定した資質・能力を発揮することができたか。

### (2) 検証の方法

- ① 働き掛け4を受けて、世の中に融合した取組を考えているかどうかを、授業中の発言やワークシートの記述から判断する。
- ② 働き掛け1を受けて、社会的な価値をとらえるという「見方・考え方」を働かせているかどうかを、働き掛け2・3・4を受けて、「かかわる人」の思いに着目し、自分の思いと比較・関連付けて考えるという見方・考え方を働かせているかどうかを実際の子どもの姿や撮影した映像から判断する。
- ③ 働き掛け1・2・3・4を受けて、想定した資質・能力を発揮したかどうかを、実際の子どもの発言やワークシート、撮影した映像から判断する。

## 5 年間の授業計画

- (1) 指定研究授業 (6月) 「新潟市、再発見－魅力度アッププロジェクト－」(25時間)
- (2) 中間検討会 (9月) 「新潟市、再発見－魅力度アッププロジェクト－」(25時間)
- (3) 初等教育研究会 (2月) 「私たちの湊と港－開港150周年プロジェクト－」(25時間)